

令和7年度地方やデジタル分野における専修学校理系転換等推進事業  
医療現場の業務DXに資するAI人材育成に向けた学科転換事業  
第1回プログラム開発委員会 議事録

■ 開催概要

日時：令和7年10月28日（火）16:00～17:30

場所：オンライン会議システム zoom

次第：1. AI 授業に関する動画へのコメント

2. 0 から導入に関わった教員からのコメント

3. 意見交換 - 生成 AI を活用した授業の可能性や懸念点について

参加（順不同）：

・プログラム開発委員会

鈴鹿医療科学大学 内藤氏、河原医療大学校 桑田氏、

中央情報経理専門学校 石黒氏、吉田学園医科歯科専門学校 熊谷氏、

九州大学病院 西山氏、近藤憲児事務所 近藤氏

・オブザーバー

ネクストキャリア 清崎氏（企画推進委員会）

【麻生塾】友重、安納、中嶋、和田、坪井、山口

【事務局（ラボラトリオ）】南、長島

1. AI 授業に関する動画へのコメント

（事前に実証授業をもとにした紹介動画を視聴）

- ファシリテーター：実際に授業を担当された先生方にお話を聞く前に、皆様に動画を見ていただいた上での感想や、動画だけではわからなかった点、ハードルを感じた部分を伺いたい。100%正しいものがあり、そこどう向かうかという話題ではないので、そこはフラットに考えていただきたい。難しそうという感想や、批判的な反応でもよいし、「これはいいな」という感想でもよい。
- わからなかった点を伺いたい。自分は見ながら、自分の担当している診療情報管理士の授業にどのように置き換えられるかという見方をした。動画であったAIの授業は、試験のための科目指導ではなく、AIリテラシー、情報リテラシーといった科目を前提としたものだったという認識でよいか。
- 今担当している授業で、AIで映像授業を作って問題を解かせる事例は、資格試験の対策授業の話になる。一方、AIを使って課題を出し、学生自らがAIに聞いて試行錯誤させる授業は、AIリテラシーを高める科目（AI基礎）として開講している。

つまり、両方の話をしていたということになる。前半の動画を作る場所は、医療情報技師の試験対策の組み立ての話であり、動画を見て問題を解く形にしているが、問題の解説も生成 AI に任せている。認定試験対策においても AI を使っている。

- 自分の学校で言えば、診療情報管理士の科目だけではなくて、情報系の科目、マナーの科目、本当に幅広い内容で成り立っている。その中で、AI の授業を自校のどこの部分に取り入れることが正解なのか、どこら辺から手を付けていったらよいか、不安を感じる。自分の科目だけであれば進められると思うが、学校全体をトータルで見たときに、全部を一気にというわけにはいかないの、導入しやすい部分とそうでない部分、それを誰がやるのかということも含めて、どう始めていけばよいか、という感想をもった。
- 動画を拝見して、作り方はとても興味深く感じた。他の人の授業を見る機会はあまりないので、そういう意味でも興味深い。一方で、先ほどの意見と同じように、自分の学校でどう取り入れたらよいかを思いながら見ていたところがある。学生の感想で「自習しているようだ」という声があった点も気になった。自分で自習する時間もカリキュラムの中で取っているが、学校として実習に意味づけをして、「集まってここ（対面）で行うことで、わからないところを友達に聞いたり、教員に聞いたりできるから、自習することも大事である」と伝えている。将来的な方向性として、「自分の好きな時間で学習していく」という話も動画の中であったが、そうになると学校に来て、同じ教室・同じ場で学ぶ意味がなくなってしまい、通信制の学校のようにしてしまうのではないかと。そこに興味深さと懸念の両方を感じた。また、まだ AI に関する授業に取り組んでいないため、「Python」と言われても具体的にどんな感じなのかよくわからないところもある。まだ、イメージしづらく、正直なところわかりにくかった。
- 通学してみんなで学ぶということの意味がなくなると、「それなら通信制の学校でいいのではないか」という話になってしまうので、そこは大きな課題だと感じている。導入のところについても、今後ぜひ詳しく聞きたい。
- 動画を視聴して印象に残っているのは、「教員が一切教えない」という授業スタイルである。それと、「すべて AI を使って何かをする」ということではなく、「AI を使えるところを探していく」という点である。AI は魔法ではないので、できることには限りがある。自分自身、業務の効率化のために最近 AI を使うようになり、

とても便利だと感じている。一方で、特に医療系の学校だと、AIを使う学生によって答えが変わってくるのではないかという懸念がある。AIの答えがすべて正しいわけではないので、疑うことの必要性が学内研修でもキーワードとして出ていた。学生は1人で授業を進めていく形になり、クラスメイトと話しながら正解にたどり着くまでのプロセスを確認することもないと、「これで本当に正しいのか」「合っているのか」という不安を抱えながら授業を受けているのではないか。また、自分の学校でどのように取り入れるのかを考えながら見ていたが、いきなり導入するにはやはりハードルが高いと感じている。ただ、大変勉強になった。

- 完全なオンラインだけではなく、対面でやりながら一部をAIでサポートするような、ハイブリッド的な授業スタイルをイメージしながら見ていた。文章があれば自動でPowerPointを作ってくれるソフトもあるくらいなので、受ける側ではなく話す側の負担軽減にはつながると思う。教える側は、学生の理解度を確認することに時間を使えるようになり、授業の様子が変わってくると感じた。一方で、学校としての方針が大きく関わるだろう。各学科単位ではなく、医療情報技師にシフトしてシステムに重点を置くなどの方向性がないと、なかなか導入は難しいのではないかとも思う。現場ではすでに生成AIを使っている人と使っていない人の温度差が非常に大きくなっている。目的をどこに置くかによって現場も変わるし、教える側としては職員の疲弊をどう減らすかに重点を置いて導入するという考え方もあると思う。単に学生側に「これを学んでください」と言うだけなら、今のやり方でも成り立っているところはあるので、そこをどう価値あるものにしていくかという点が難しい部類に入っていると感じている。
- このツールを「何を教えるために使うのか」を考えながら見ていた。試験対策の知識だけを整理させるのであれば、従来のeラーニングと同じになる。一方、医療情報技師としては、課題解決力を養いたい。今回の例のように、課題を出して、それに対してChatGPTに聞いて、どんな課題があるかヒントをもらい、さらに答えのヒントももらっていくことを繰り返したときに、本当に課題解決力が身に付くのか。こうした目的でこのツールを使って効果的なことができるのかどうかは、相当工夫しないといけないと感じた。先生も学生も、効率を上げて無駄な時間を省き、時間を作るのだという話は理解できる。同時に、できた時間をどう使うかというところ

は、今まで以上に難しくなっていると思う。良い部分はわかるが、上手に使いこなすのは難しそうだと感じながら見ていた。

- (有識者) 評価・アセスメントの立場から見ると、前期の授業が終わったタイミングで、学生の小テストの進捗状況、受験した模試、入学時の基礎学力(偏差値)と、毎回授業後に取っているアンケートの結果をすべて統合して、学習態度の評価と、受講した授業の最終総合評価を突合しながら見ている。AIに聞いてしまうとすべてわかるという学習スタイルが実際に出てきており、小テストの設計もまさにそうなっている。学生がどんどんテストをこなしていくと次のテストに進むが、AIに正しく問いを立てればテストはクリアできる。ただ、その中でも個人差も見られ、比較してみると差が出てくる。全員が必ず間違える問題もあり、明らかに傾向値が出てくる。AIを活用した学習スタイルにおいて重要なのは、学生側にどこまで「問いを立てる力」が身に付いているかという視点だと感じている。AIやデータの項目は難しくとらえられがちだが、偏差値では低い学生が意欲的に小テストを解いたり、Pythonの基本的な使い方や諸問題をしっかり受けたりしている姿が見られたのは驚きだった。AIレコメンドをコピペしたのかどうかまでは踏み込めていないが、AIとの対話ログまでアセスメントに組み込めれば、その学生が本当に理解しているのかどうかの評価もできるのではないかと感じている。そうすると、AIを活用してどのように実践的な問題を解いているか、まで評価できる可能性があると感じている。

## 2.0から導入に関わった教員からのコメント

- ファシリテーター：実際に担当された先生方にお話を聞くパートに入っていきたい。導入のビフォーアフター、ゼロから準備した教員のリアルな体験、実際やってみて楽になったこと・新たに、あるいは今も大変なこと、という三つを用意しているが、まずは「ゼロからどう導入したか」を聞けると、前半に出た課題にもつながると思うので伺っていきたい。
- 麻生塾教員：自分はAIを学生にバンバン使わせるというスタンスではない。バックグラウンドとしては、この専門学校の卒業生で、診療情報管理士科を出て6年間医療機関に勤めていた。医療事務や診療情報管理室の立ち上げなどを経験し、声をかけてもらって戻ってきて教員をしている。

- 麻生塾教員：今年度から学校に異動してきていて、診療情報管理士の専門的な指導経験はない。担当しているのはコミュニケーション実践や就職実務などで、一般的な就職の進め方を扱う授業を担当している。
- 麻生塾教員：導入の経緯として、私が担当している医療情報技師の試験対策科目は、学科の新設に伴い新規開講だったので、完全に一から立ち上げる形になった。最初から AI を使おうと思っていたわけではなく、法人内で資料作成のための AI システムが用意されており、皆がそれを使っていた。引用を読み込ませるとパワポの資料ができるようなシステムがあり、授業資料を作り始めたときにも自然と AI を使う流れになった。授業準備をするとき、当初は学校で契約していた ChatGPT の有料版を使っていた。その後、Gemini など複数の生成 AI も併用する形になっていった。最初はカリキュラムを AI に全部読み込ませて「どう組み立てればいいのか」を相談するところから始めた。診療情報管理士の試験対策や実務に関する授業では、AI を学生に使わせるものではないが、授業の動画化を進めたいという意図があった。自分自身も AI をかなり使って授業を作っている。学生は使っていないだけで、動画作成の効率化や属人化の解消のために、AI を素材作りに活用している。
- 麻生塾教員：AI を授業準備に使うことで負担はかなり軽減されている。スライドの構成を考える段階から AI に助けてもらうことで時短になっているし、今後は動画化にも進めていきたいと思っている。
- 麻生塾教員：法人として「AI 活用で業務効率化を進めよう」という方向性があり、その流れでまず教員が動画化などに使うフェーズから入った形になる。研修としては、生成 AI の基本使い方を紹介する簡単な講習会があり、資料を読み込ませて自動でスライド構成ができる仕組みの紹介があった。ただ「これをどう授業で使うべきか」までは特に決められていない。動画化に関する研修も少しあった。

(質問) AI を活用した動画作成について、具体的に伺いたい。

- 麻生塾教員：AI で動画を作るといっても、AI が動画を丸ごと作るわけではなく、スライドの骨子や説明文を AI で作り、その読み上げ音声を使い、PowerPoint の録画機能で動画にするイメージである。AI が部分的に素材づくりを担い、それを組み合わせる形で動画に仕上げる形になっている。

(質問) 教員自身も試行錯誤を続けている状態か。

- 麻生塾教員：法人内にあるツールを手探りで使いながら進めている感覚で、「必ずこれを使うべき」という強制はなく、まず使ってみようという雰囲気である。使わなくても問題にはならないが、触ってみると意外と使えるため、多くの教員が少しずつ試している状況である。

(質問) 教員としては、教科者だけでなく、こういった情報を付加させるか、という工夫がそれぞれにある。そうした点はどのように取り組まれているか。

- 麻生塾教員：教科書 PDF だけでなく、試験範囲、到達目標、他の参考テキスト、基礎知識テキストなど複数の資料を AI に読み込ませ、必要な内容を組み合わせてスライドを生成している。最新ガイドラインが必要な場合は、AI に「Google 検索して最新のものを取得してからまとめてください」と指示し、最新情報を付加している。
- ファシリテーター：実証授業を形にしていったプロセス、特に最初のステップについて、より具体的に伺いたい。
- 麻生塾教員：学生が AI を使う授業（AI リテラシー科目）は、文科省事業があることも大きな理由だが、初回授業で「この授業は AI に質問しながら進める授業である」と明確に説明し、困ったときにどう質問するかを考える授業であると伝えて導入した。試験対策科目では、問題の解説を AI チューターに任せるようにしたところ、学生が「AIの方がわかりやすい」と言ったため、すべて AI に切り替えた。成功体験が非常に大事で、自己紹介文を AI で作れた、Python でエラーなく動くプログラムを書けたなど、成果を実感すると学生は AI を使うことに前向きになる。逆に、我々が「AI は難しい」と構えるほど授業は成立しにくくなる。学生はデジタルに慣れているので、「自分たちより使いこなしてくれたらいい」という意識でいることが大事だと感じている。
- (実証授業の企画に関わる委員より) なぜ学生に AI を使わせるのかという点では、今の社会全体が AI を前提として動いており、教育も「AI を禁止する」のではなく「AI がある前提でどう扱うか」を教える段階に来ていると考えている。AI は個別

の理解度に応じた説明が可能であり、教員一人では難しい部分を補ってくれるという教育的メリットもある。一方で、導入初期はうまくいかないこともあり、計画した授業が機能しないこともあった。しかし、AI活用授業では学生の学習データが可視化されるため、問題数や難易度を調整しながら「アジャイル型」で改善できる。失敗しても傷が浅いうちに修正できるのが良いと感じている。麻生塾教員：学校に来て学ぶ意味、先生の役割は、AIがあっても失われるものではない。AIは情報提供に優れるが、学習方針や学ぶ順序、戦略的な視点はまだ人間の役割として大きい。そうした整理も必要になる。

(質問) 課題解決力を育成するための工夫は。

- 麻生塾教員：課題解決力の育成は、AIリテラシー科目だけでは完結しない。別の科目で、実際の学校内業務（例：再試験の業務フロー）をヒアリングし、学生が改善案を提案する授業も実施している。AIが答えを出しても、それが現実の困りごとに合うかどうかは自分で考える必要があり、そこで課題解決力が育つと考えている

(質問) 学生がAIを直接活用する授業以外への波及はあるか。

- 学生がAIを使うことで、他の授業にも自然に広がるのが理想だが、実際にはまだ十分ではない。グループワークで「AIを使ってもよい」と促しても使わない学生が多い。ノートの取り方がわからずプリントを欲しがる学生もいて、高校までの学び方が影響していると感じる。ツールを自分で調べて使う段階にはまだ至っていない。今は部分的な導入にとどまっているが、ツールを自分で探し活用できるようになれば、他の科目にも波及していくはずであり、まだ途上だが今後期待したい。

### 3. 意見交換 - 生成AIを活用した授業の可能性や懸念点について (会議時間の都合で、簡単なコメントのみを伺った)

- ファシリテーター：ここまで話してきた中で、AIをどう導入しているのか、先生が使う段階から学生が使う段階にどう移行していったのかという話は、わかるころが多かったと思う。全面的に導入するには学生の意識づくりが必要で、まだ乗り越えるハードルはあるが、その部分にも成果が見えてきていると感じている。次回に

かけて、導入の始め方について、今まさに試行錯誤している内容をより具体的に伝えられると、学生が使う場面のイメージも広がると思う。また、これを2年3年と続けていくと、対面授業を行うことの価値が問われてくる。通信教育でもよいのではないかという問いにどう向き合うか、対面の価値や教員の役割を今後さらに話していけるとよいと感じている。何かコメントはあるか。

- ChatGPTのようなAIは、自分が興味を持って質問したことにしか返してこないの  
で、思いつかなかったことには到達できない。図書館で、まず棚を眺めるような体  
験や、司書に助言をもらうような意外性のある学びはAIでは得られない。教科書  
の価値や、コーチのように方向づけをする役割は依然として人間に残る。AIででき  
ること・できないことの前提知識を共有する機会があると、議論のイメージがより  
湧きやすいと思う。
- 具体的なインターフェースに触れる機会や、学生の体験がどのようなものかを実際  
に見ることができると、できることが広がるかもしれない。次回の委員会か別の機  
会になるかもしれないが、そうした場を設けるのもよいと思う。導入の具体、AIの  
可能性と限界をリアルに体験し、対面とAIのハイブリッドによる学びにおいて、  
先生の役割や学校の機能をどう位置づけるかという仮説を議論できると、一歩進ん  
だ話ができると感じている。3人の先生方には難しい依頼だったと思うが、具体的  
な工夫や苦勞のディテールが伝わり、共有できたと思う。
- 使っていくことで価値がどう変わっていくか、人がどう改善されていくかというの  
は、今後必ず議題になるテーマだと思う。次回はそのあたりも話せるとよいと感じ  
ている。
- (事務局) 事前のメールで「どのような支援があるとよいか」というテーマも挙げ  
ていたので、何かあればメールで送ってほしい。次回以降に反映したい。準備いた  
だいていた内容があれば事務局メールアドレスまで送ってほしい。

以上